



やってきた土器・出て行った成川式土器

橋本達也

成川式土器の強い個性が生み出された背景には、他地域の土器との情報接触の少なさが一因にあると考えられる。とはいえ、九州南部にも古墳時代土器としての土師器や須恵器は持ち込まれているし、また多くはないが、成川式土器もこの土器の本来の分布圏外で発見されている。その概要をつかんでおこう。

九州南部にもたらされた古墳時代土器の様相

古墳時代前期に遠方からもたらされた土器としては、庄内系・布留系の甕がある（甲斐 2013）。またその模倣品もつくられている（図 4）。薩摩半島では、南さつま市金峰町芝原遺跡（図 1）、同市坊津町の清水前遺跡（図 2）・大隅半島では大崎町沢目遺跡（図 3）・肝付町東田遺跡など、それぞれ九州の西周り・東回りの港湾に近接するような遺跡での出土が特徴である。これらの土器の生産地や影響を与えたのは、西周りでは熊本や北部九州、東周りでは豊前・豊後などが候補となろう。

また、霧島市国分の城山山頂遺跡では二重口縁壺、甕、小型丸底壺や小型器台などがまとまって出土している。遺跡名称のとおり山頂にあり、特異な性格をもっている。陸路を介した熊本地域との関係らしい。

なかでも、南薩の西海岸海路の拠点と考えられる芝原遺跡では、庄内系や布留系の甕など外来系の土器が数多く出土しており、他の遺跡では少数の土器が点的に入る様相とは大きく異なる（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013）。小型倣製鏡 3 点、破鏡 2 点や、弧帯文状の線刻紋様のある小型丸底壺（図 5 左）広域分布する鋸歯文土器（常松 2002）に属する小型鉢など（図 5 右）、古墳時代前期に活況を呈していたことがうかがえる。

なお、ごくわずかに南島からの搬入土器も清水前遺跡などで出土している。

古墳時代中期以降、運ばれてきた土師器は良くわからない。とはいえ、土師器の影響を受けて作られた成川式土器は散見される。とくに、薩摩半島西部では古墳時代中期後半以降、台付甕とともに丸底甕も一定量出土するようになり、大隅では宮崎平野地域の影響を受けた土器などもみられる。

それに対して、古墳時代中期以降普及する須恵器は、九州南部では窯跡が確認



図 1 芝原遺跡の庄内系・布留系甕



図 2 清水前遺跡の布留系甕



図 3 沢目遺跡の布留系甕



図 4 鹿児島大学構内遺跡出土の土師器模倣成川式土器



左：弧帯文状、龍？
右：波状文・格子文

図 5 芝原遺跡の線刻文様のある土器



図6 鹿児島大学構内遺跡出土の
朝鮮半島西南部産陶質土器

されておらず、また出土資料の様相から消費地としてのみ受容したと考えられるので、明らかに遠方からもち込まれたものである。古墳墓での初期須恵器の出土が目立つが、集落遺跡でも少数は出土している。

それらは、大阪府陶邑窯跡群^{すえむら ようせきぐん}、愛媛県市場南組窯跡群^{いちばみなみぐみ ようせきぐん}、これら以外の生産地、という3～4以上の窯場からもたらされている。また特異な事例として、鹿児島大学構内遺跡^{コンサンガン}では、5世紀後葉の朝鮮半島西南部、榮山江流域産の陶質土器も見つかっている（図6）。ただ、総じて成川式土器の分布圏では須恵器が他地域と比べて少なく、古墳時代後期になっても主要な生活土器として採用されない。その辺が、また独特の土器様式を生み出す背景にもなっているのであろう。

九州南部から旅に出た成川式土器

現在、成川式土器は、東は大阪平野、南は沖縄本島・伊江島まで確認されている。これら運ばれた土器は、九州南部の人びとの移動を物語る資料である（池畑 2008・梅木 2003・中村 2013）。

福岡市比恵遺跡^{ひえ}第91次調査では中津野式の甕が古墳時代前期初頭の住居跡の可能性ある遺構から、また岡山市中撫川遺跡^{なかなつかわ}では古墳時代前期中葉の東原式の壺が溝から出土している。古墳時代中期前葉には熊本市熊本大学構内遺跡^{きゅうほうじ}で東原式の壺が溝から、中期後葉には大阪府八尾市久宝寺遺跡^{こたんじま}で壺と高杯などが九州南部の人が営んだとみられる竪穴住居から出土している。佐賀県鳥栖市東山2号墳では古墳時代後期後葉の古墳周溝内に埋設されて笹貫式の壺が出土している。大阪府八尾市五反島遺跡^{ごたんじま}では、時期の決め手に欠くが古墳時代中～後期の遺物を含む地層から笹貫式の壺が出土している¹⁾。

けっして多くはないが、これまであまり認知されていなかったこともあり、成川式土器の分布圏外で出土した場合、ちょっと変わった弥生土器の混入などとして認識されていない場合もあると思われる。台付甕など破損しやすく、土師器にみえないものはなおさらである。今後の確認を期待したい。

なお、久宝寺遺跡では土器の移動に留まらないその場での生活がうかがえる。これに関しては、古代に移配された畿内隼人の居住地、萱振と近いこともあって、5世紀の隼人を示すものと取り上げられたりもしているが（東 2007）、隼人はあくまでも天武朝以降、律令体制の整備を目指した政治が生み出した「民族」であって、古墳時代にさかのぼる民族や文化ではない。そもそも古墳時代中期、久宝寺遺跡やその周辺は渡来人を含む多様な人びとの活動した地であり、成川式土器にのみ異民族支配と結びつく隼人を重ねることは適切でない。

成川式土器は南にも動いている。種子島・奄美大島・沖縄本島・伊江島で確認されている（図8）。貝交易を含む南島社会との交流の一端が示されているのであろう。とくに、種子島広田遺跡では在地墓制の覆石墓に在地産土器とともに中津野式土器が供献されていた。南島ではいまのところ土師器が知られておらず、交易の交渉相手の古墳時代人は成川式土器を用いる九州南部の人びとであったのだろう。

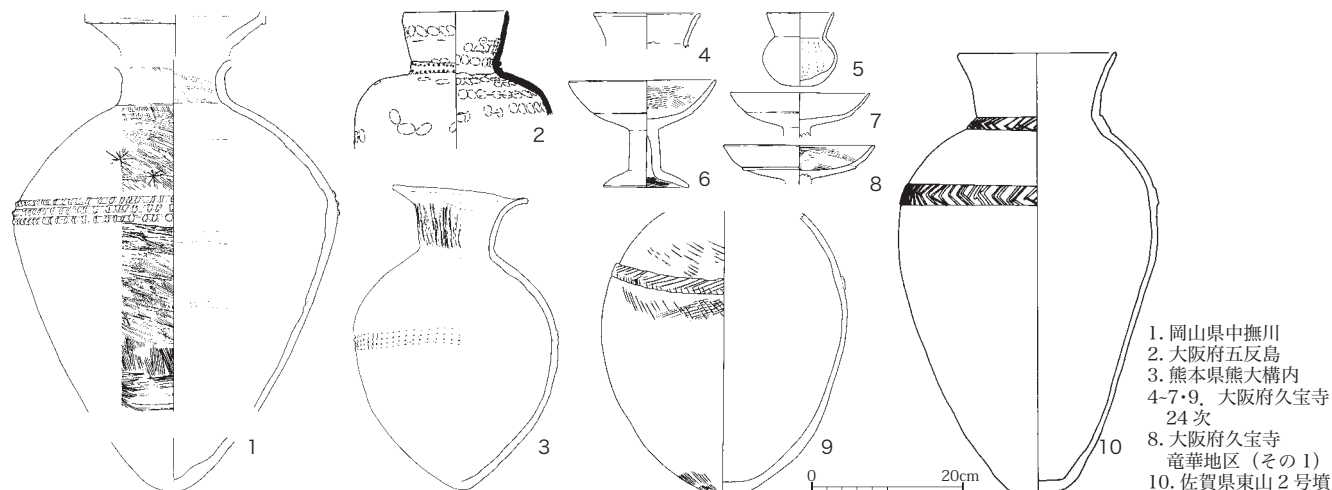


図7 九州南部から運ばれた成川式土器

註

- 1) このほかに成川式土器の可能性が指摘されたものに、岡山県王泊遺跡出土壺片（池畑 1980）、奈良県纏向遺跡の壺片がある（石野 1986）、これは豊後、東九州の可能性はある（梅木 2003・坪根 2003）。

引用文献

- 池畑耕一 1980「岡山県王泊遺跡出土の成川式土器」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会
- 池畑耕一 2008「鹿児島から岡山へ、岡山から鹿児島へ—考古資料からみた交流—」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』同論集刊行会
- 石野博信 1986「纏向遺跡採集の「南九州」系土器」『青陵』第59号 奈良県立橿原考古学研究所
- 梅木謙一 2003「近畿の西部瀬戸内系土器—複合口縁壺を中心に—」『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 甲斐康大 2013「九州南部における古墳時代前期の地域間交流」『古墳時代の地域間交流1』第16回九州前方後円墳研究会熊本大会実行委員会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『芝原遺跡4』弥生時代・古墳時代編
- 常松幹雄 2002「九州地方の土器」『考古資料大観』第2巻土器Ⅱ 小学館
- 坪根伸也 2003「南九州における土器と集落」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会大会事務局

- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置付け」『ナガラ原東貝塚の研究』熊本大学文学部木下研究室
- 東 徹志 2007「畿内からみた南九州」『日向・薩摩・大隅の原像—南九州の弥生文化—』大阪府立弥生文化博物館

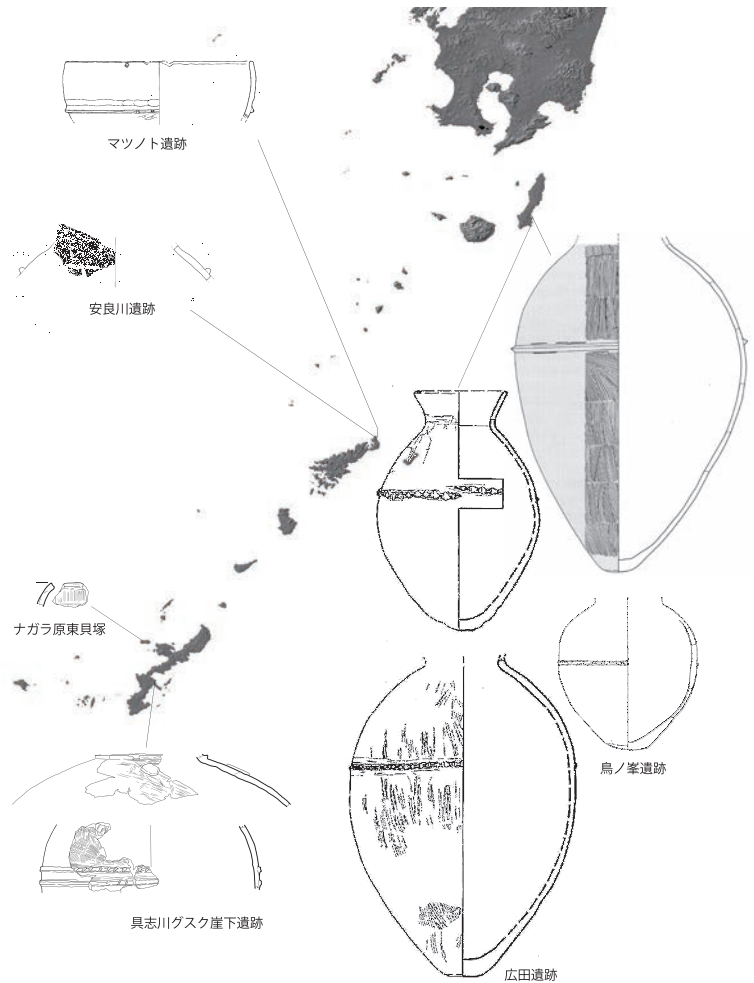


図8 琉球列島出土の成川式土器（中村 2013 改変）

たねがしま ひろた

種子島 広田遺跡 北区2号墓

みなみたねちょう

南種子町

土壙墓、覆石墓群から特徴的な貝製副葬品が大量に出土したことで著名な遺跡である。北区2号墓では、在地土器とともに中津野式土器が供献されていた。



南種子町教育委員会蔵・写真提供